

# 尾形先生のこと

奥村三和子

はじめて尾形先生にお目にかかったのは、私が奈良女子大の三回生のときであるから、もう20年近く昔になる。当時先生は京都大学の教養部に奉職なさっており、女子大へは週一度アメリカ文学演習の授業におみえになっていた。大学院生もまじえたその授業では毎回一篇ずつエマソンの詩を読んでいたが、コーヒーブレイクに文学談義をお聞かせいただいたり、奈良公園まで散索に出かけたりと、実に楽しくあっという間に過ぎる90分であった。とにかくまじめでお堅い一方の女子大にあって、気さくで型破りなところのある尾形先生からは、女子大の先生方とは一味も二味も違った鮮烈な印象を受けた。幸運にも先生と帰宅の方向が同じであった私は、そのうち教科書作りのお手伝いという名目でしばしばご自宅へも伺うようになり、朝から晩までおじゃまして、美しい奥様お手製のサンドイッチやグラタンをごちそうになった。伺う度に、先生が開口一番、「何か面白いことはありましたか」と聞かれるのには閉口したが、気分が落ち込んでいるときでも、先生とお話していると不思議とゆったりした心持ちになり、新たな勇気が湧いてくるのであった。こうして親や直接の指導教授には話にくいことでも先生には気軽に聞いていただき、その都度、具体的に適切なアドバイスをしていただいた。大学院への進学、結婚、就職といういくつもの人生の節目を無事乗り越えてこれらたのも、いつもさりげなく、しっかりと支えてくださった先生の大きく暖かな目差しがあったればこそ、と感謝している。だから先生が、母校の京都大学で退官を迎えたいといつかねてよりの御希望をまげて、大学院博士課程のために奈良女子大においでいただいたと聞いたときには、とてもうれしく心強く感じたことであった。

先生はまた、たいへんな知的怪力の持ち主でもある。5年前の春に「また本

作りのお手伝いを」というお電話をいただいて、学生時代と同じ調子で気軽に先生のご自宅へ伺った私は、目の前に積み上げられた莫大な量の原稿を前にして、正直なところこれはたいへんなことをお引き受けしてしまったと思った。とにかく読めども読めども原稿がなくならないのである。その年の夏に先生は車に乗っておられて追突されるという災難にあわれたが、ただでさえ暑い最中、首にギブスをはめて執筆を続けられ、秋には500頁余にもものぼる大著『詩人E・A・ポー』を脱稿された。お疲れが出なければよいがとずいぶん心配したが、疲れたのはお手伝いにあがった者たちばかりで、先生はますますお元気であった。さらにその4年後には45年に及ぶ研究生活の集大成である『ウォルドル・エマスン』を出版され、先生のもっておられる底力のすごさを再び目撃することになった。

かつてある集まりで先生は「一樽の知恵より一滴の運」という言葉を引き合いに出されて、人生においては運というものがいかに大切であるかというお話をされたが、実は先生は人生のどんな好機をも逃がさぬ大きな知恵の樽をお持ちなのだ。そしてその樽は絶え間ない研鑽の結果出来あがったものであり、今もお日々確実に大きくなり続けているのである。尾形先生、どうぞいつまでもお心もお身体もパワフルでいらしてください。